

限りある命の不確定性と看取り対応について①

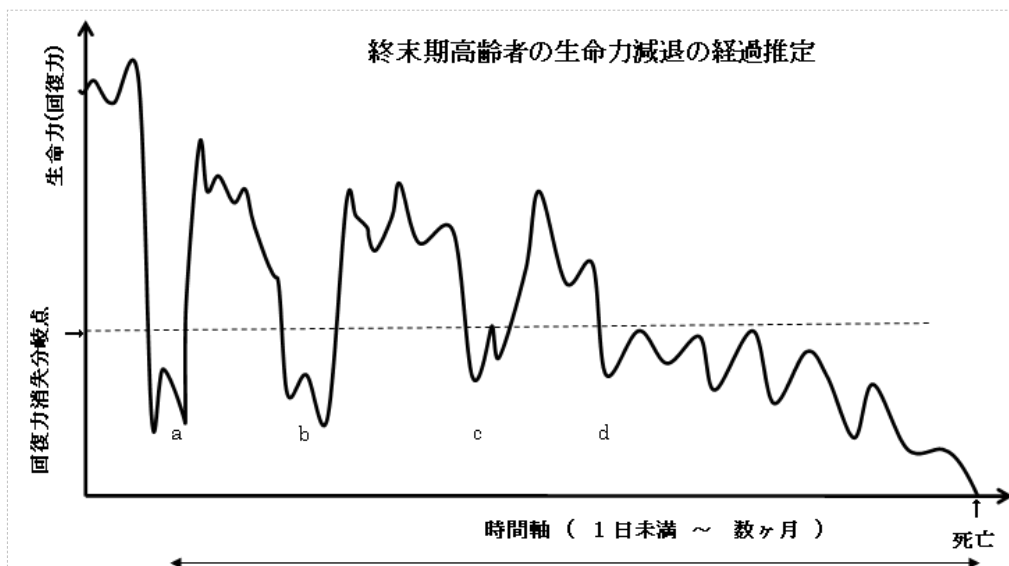
先日、経鼻経管栄養の方が入所中に急変して亡くなりました。当日夕方私は帰宅途中で電話を頂きとんぼ返り致しましたが、その時、静かに見守るだけで良いと電話口で職員にお伝え致しました。高齢になってくると気が付くかどうかは別として複数の合併症が隠れていて救急蘇生は単なる延命治療になりかねません。この方もそうでした。

この一羊館にはそういう意味でいつ急変してもおかしくない病気を沢山かかえながら過ごしている方々が沢山いらっしゃいます。でもだからと言って特別扱いにはいけません。

「あしたに道をきかば、ゆうべに死すともかなり」（論語）とも言います。命は短くとも長くともその軽重に変わりはありませんので、その生きている間こそ安心・満足を味わって頂かなくてはなりません。誰にとってもいつの日か来る死は宿命と受け止めて粛々と対応するのが我々介護のプロだと思います。

急変が起こっても慌てず騒がず唯粛々と受け止めて行くのが、ご本人にとってもご家族にとってもプラスになることですから、必要な我々スタッフの心構えでもあると思います。

理念を忘れずに頑張りましょう。



老人保健施設一羊館の理念

利用者の方々すべてに尊厳・安心・満足を！

一羊館の行動指針

私たちは、保健・医療・福祉の架け橋のプロに徹します。

私たちは、利用者の QOL・職員の QOL・健全経営の 3 立を目指します。

私たちは、質向上のために日々の小さな工夫を忘れません。

